

AFTERNOON TEA

久留米大学医学部生理学第一講座

田中永一郎

東京慈恵会医科大学，神経生理学研究室の加藤総夫先生とお話しする機会があり，先生から日本生理学会誌の新企画「Afternoon Tea」に寄稿してみないか，とお誘いを受け，喜んでお引き受けした。

何度か他地方の方々と酒を酌み交わして分かったことは，九州人は豪快な酒豪ぞろいで，付き合いが大変だとのイメージを持たれていることである。心外な話である。確かに酒豪もいるが，すべてが酒豪のはずがない。思ったことを歯に衣着せず，ストレートに話し，九州の方言がけっこう粗暴に聞こえる事もあって，豪快との評価をいただくのかもしれない。方言を知らずに聞けば，まるで喧嘩をしているようで，びっくりなさる方も多しことと思う。私の住む福岡県久留米市の近郊には，その品質で有名な造り酒屋が点々とあり，その酒は，居酒屋に行けば味わうことができる。客

は酒を飲みながら，笑い，大声で話し，居酒屋はどこも姦しいのが常である。私はといえば，酒を飲んでも，静か過ぎるとおしかりを受け，九州人としては，やや後ろめたい思いがある。

私は平成9年から久留米大学医学部生理学第一講座で講師に任ぜられ，現在はラット海馬を対象に，酸素・グルコース欠乏（虚血負荷）による中枢神経細胞死のメカニズム解明を目的に，細胞内記録法を用いて実験を行っている。最終的には虚血性神経細胞死に対する保護作用を持つ物質を検索したいと思っている。当大学医学部では，来年にはコアカリキュラムが始まるので，学生諸君に生理学の学問としての楽しさ，あるいは考えることの楽しさを伝える機会は減少して行きそうに思える。最近では学生諸君の考え方も変質してきており，知識を応用することには興味を示しても，学問自体が面白いと考える諸兄は激減しているよう



Feverfew

だ。それが、慌ただしい世の中の趨勢なのかもしれないが、出来れば一人でも多くの後輩に学問の楽しさを知ってもらいたいと思う。

以前、私は休日にはバイクでツーリングを楽しんでいたが、外国留学後バイクを購入していない事もある。現在は子供達と映画を観に行ったり、一日園芸でハーブの世話をし、できたハーブを使ってときどき料理を作っている。私が厨房に入ることを妻は迷惑がっているが、子供達と一緒にお菓子作りをすると、子供達はお菓子作りに夢中になる（なにせ子供の事だから1ヶ月くらい興味が続けばいいところだが）。学生諸君の心中に学問への興味（あるいは知的探求心）をかき立て

るのも、料理と同じように楽しい体験を共有して初めて出来ることかもしれない。ある国際会議で出会ったフランスの科学者は「学生に講義をするのが楽しみだ」と言っていた。「なぜなら、私が学生らに科学のわくわくするような楽しさを伝えることができ、その中の一人は必ず科学の虜になってしまうのだから。学生が私を訪ねて来たときに『ようこそ、我がクラブへ』と言うのが講義をしている者の楽しみだ。」と彼の科学者は言っていた。休日の午後は、ハーブティーを飲み、子供達と共作のお菓子を食べながら、共通体験を通して学生諸君に学問の楽しみを伝えるにはどうしたら良いものかと考える今日この頃である。

筑波大学基礎医学系生理学グループ

杉野 一行

生理学は二度訪れる

東京女子医大の白川秀樹先生からバトンを受けました。彼氏とは筑波大の生物科学系時代からのお付き合いである。そのようなわけで、私もゾウムシの膜電位とか繊毛運動とかを調べていたクチだ。その後医学に移り、いきなり哺乳類の脳生理学を始めたわけだが、あまりにもかけ離れていたのかえってギャップを感じなかったような気がする。基礎医学系ということもあり、移ってから理学部的な研究生活を送っている。しかし、昨今の医療事故問題も手伝ってか、ここへ来て本学でも医学教育改革の動きが活発化している。そこで、（このコーナーは何でもありということなので）生理学の教育というサイドで少し愚痴をこぼさせていただこうと思う。

そもそも医学部においても看護学部においても、生理学というと「難しくて、わけわかんねえ」と相場が決まっている。そのくせ現場に行った人達に聞けば「こんな大切なものはない。もっとしっかりやっておけば良かった」と言う。現に、私が生理学を担当している看護学校でも、何人かの3年生が、生理学の単位は1年次に取得済みであるにも関わらず、時々授業を聴きに来る。彼女

らが後輩達に向かって曰く、「患者さんに『どうして?』って聞かれて説明できなかつたら恥ずかしいよ。ちゃんと勉強しときな」。有り難いお言葉である。最近の患者さんは結構知識があるので彼女らもやり辛かろうにと、つい思ってしまったりもする。さすがに現場を一度経験してmotivationが上がった状態での生理学に対する姿勢は格別なものがある。勿論、生理学に限った話ではないだろうが。

本学に限らず、最近の医学部では統合カリキュラムやPBL (Problem Based Learning)-Tutorialを取り入れる方向にあり、early exposureということで早めに現場を見せるなり体験させてから講義に入る手法も取り入れられつつある。しかし、生理学の必要性が身に染みるほどのexposureとなるとそうそう早い時期には行えない。特に3～4年しかなくtutorial教育もままならない看護学校でそのような機会を与えようということになると、やおら病棟実習を持って来ざるを得ない。事実上不可能であり、仮にそのように組もうとしても、結局は、患者に直面する以上はせめて病理学ぐらいは事前に取りせたい、病理学を学ぶためには生理学を一通り学んでおいて欲しい、となって



(編集部注：杉野先生と看護学部の学生さん。スポーツフェスティバルにて。)

しまう。せめて1年生向けの概論と3年生向けの各論に分ける余裕があればいいのだが。

仕方ないので、私の場合は3年生を対象に何日かけて「国試対策」と称して、抜粋的に分野を絞ってではあるが、生理学を教えさせて貰うことにしている。1年生の時とほとんど同じ話を同じようにしているにもかかわらず、質問はバンバン出るし、眼差しは真剣だし、挙げ句の果てに「1年生の時もこういうふうに教えてくれれば良かったのに」などと言われると実に複雑な気分である。

ちょっと八百長っぽいが、そのお陰で3年生にはかなり信頼されたようで、文化祭や運動会にはいつも特別な立場で呼んでくれる。もっともそれは大切な「お客様」というよりは、同類或いは戦力としてであるが…。特に仮装競争のマネキンにさせられるのはとても恥ずかしい。しかし、学生達からは若さを与えて貰っていると思っている。教える側の精神的・肉体的若さを保つためにも是非生理学は実習の後にもう一度教えるべきである。

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部
理学療法学科

藤野 英己

岡山大学大学院医歯学総合研究科システム循環生理学の毛利聡先生からバトンを受けるよう御指名頂きました、鈴鹿医療科学大学保健衛生学部の藤野と申します。私は理学療法士、診療放射線技師や管理栄養士などのコメディカルといわれる医療者を養成する教育機関に勤務しております。

近年、コメディカルを養成する教育機関の四年

制大学化が急速に進んでいます。従来から欧米などの諸外国では、コメディカルの教育は四年制大学、もしくは専門大学院で行われていましたので、わが国では、この分野の途上国ともいえます。これらの職種は“医療技術者”と称されて、いわゆる“技術者”として、“職人的”な教育が続けられていました。ところが、近年、医療の高度化や

高学歴化がより一層高まったことを理由に大学化が一気に進んでいる現状です。また、医療福祉に関連する職種に人気が集まっていることを背景として、新設される教育機関も急速に増加しているようにも見えます。このような現状の中、生理学を筆頭にして、基礎医学の重要さがクローズアップされています。

昨年、わが国から二人の研究者がノーベル賞を受賞し、話題となりました。このことは日本の科学水準が世界レベルになったことを意味し、非常に喜ばしいことであると思います。先日、ノーベル賞受賞者の会談の中で、「なぜノーベル賞を受賞できたのか？」という問いに対して、パスツール（1822～1895）の「幸運の女神は準備したと

ころを訪れる」という言葉を引用されて、日々の努力と様々な現象を捉えるための準備が必要であることが述べられていました。

生理学はコメディカルの各専門領域においても学問の基盤を成すものであり、この領域の教育や研究にも重要であるとの認識が深まっています。私たちも単なる技術者ではなく、領域の専門性を深められるように教育と研究をおこなっていきたいと考えています。ようやくコメディカルの領域も学問を築き上げるための“場所”が見つかったように思いますので、この場所に土台を築き、柱を建立して行くための準備を行い、“テイストがいい”医療者を育てていきたいと思います。